

海という名の本屋が消えた (59)

平野義昌

鈴木商店 その3

鈴木商店焼打ち後から経営破綻までを駆け足で見える。

8月13日に皇室から政府に救済金が下賜されると、三井・三菱が100万円の寄付を申し出る。財閥は世間へのアピールを心得ている。

〈世間の眼は、また鈴木に向けられてくる。焼打ちされ廃墟に立っている鈴木に、同情ではなく、寄付を要求する声が。〉^{註1}

西川文蔵支配人は鈴木の利用回復を目指すため金子直吉に寄付を提案する。金子は相変わらず静観する態度。西川が、全国の関連会社が襲撃されるかもしれないこと、寄付は鈴木のため、と説得しても納得しない。西川はとうとう「主家の安泰」を持ち出す。金子はようやく50万円の寄付を承知した。

15日、西川が手紙で高畑誠一ロンドン支店長に焼打ちの原因を伝えている。寺内内閣と反対派の政争、社会主義者の煽動、「大阪朝日」による攻撃(捏造)をあげ、金子の対応にも不満を漏らした。

鈴木が会社として米騒動について意見を表明したのは12月になってから。悪意ある曲解者が無辜の民を煽動、米価問題は鈴木に無関係であると資料をもって弁明した。民心が落ち着いてからという配慮だが、既に民衆も報道も熱は冷めてしまっていた。

鈴木商店は1874(明治7)年に鈴木岩治郎が洋糖取引商として創業した個人商店である。金子は岩治郎に算盤で殴られながら奉公し、居留地の外国商人に鍛えられた。番頭として主家第一に仕えた。国力増大の波に乗り、樟脳、製糖、薄荷、セルロイド、製鉄、造船と次々に製造業を立ち上げ、傘下に置いた。第一次世界大戦が始まると、世界を相手に商売を拡大した。焼打ち当時2000人の従業員を抱えていても、資本金50万円の合名会社で経理を公開していないし、帳簿も揃っていない。〈貿易といっても、日本でつくった物を外国に売るというだけではない。全世界の相場の刻々の動きをつかみ、外国でつくった物をさらに他の外国に売る。第三国間貿易は、鈴木がはじめ、鈴木のお家芸となった。〉^{註1}

鈴木所有の船と船会社からチャーターした船が、南米、アジア各地、ヨーロッパを往来する。買い手が決まらないうちから荷を積み出港し、到着する港と買い手を見つける。社員たちはそんな仕事を競ってやった。17(大正6)年秋、金子はロンドン高畑宛の手紙で、戦争終結が迫る欧米の需要供給調査報告を求め、こう書いた。〈……この戦乱の変遷を利用し大儲けを為し三井・三菱を圧倒する乎 然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎 是鈴木商店全員の理想とする所也(後略)〉^{註1}

金子流「天下三分の計」である。19、20(大正8、9)年、年商は16億円となり、三井物産を追い抜いた。〈直吉がつくり、直吉の息吹のままにある鈴木商店。それこそ唯一の鈴木商店であり、それ以外に鈴木商店は存在しなかった。鈴木商店は金子直吉の中にある。(後略)〉^{註1}

会社が大きくなるにつれ、神戸高商(神戸高等商業学校、神戸大学の前身)や東京高商(東京高等商業学校、一橋大学の前身)、帝大卒業者が入社してくる。高畑を筆頭に高商派は、国際企業となった鈴木商店は近代的組織に生まれ変わらなければならないと考える。

西川も東京高商中退のインテリである。金子は西川の人柄を信頼し才能を認め、後継者と考えていた。その西川にとって鈴木は、現実の企業＝従業員と家族であり、傘下の工場であり、世界中で扱う商品である。〈夢見る人直吉とちがい、聡明な処世家として、日々の全活動をともしきる支配人として、その点、西川は直吉について行けない。直吉の鈴木商店像は、もはや虚像でしかない。〉^{註1}

戦後不況でも、米騒動が起きても鈴木の子は日本一になった。金子は高商派の経営改善要求を受け入れなかった。西川は金子と高商派との間で心労も多かっただろう。20(大正9)年5月、胃潰瘍で亡くなる。享年46。

1922(大正11)年の海軍軍縮、23(大正12)年の関東大震災が鈴木の子の事業にのしかかる。鈴木は傘下に銀行を持たない。資金は外部に頼っているのだが、金子は財閥金融・産業を批判していた。〈もともと既成資本と密接な関係にある大銀行筋は、こうした直吉の高姿勢に対して、いよいよ、そっぽを向き、融資の道を断った。このため、鈴木商店の金融は、台湾銀行・正金銀行などの特殊銀行に頼らざるを得ない。〉^{註1}

22年、台湾銀行(以下台銀)は日本銀行から援助を受ける条件として、鈴木の子の業務監督に乗り出す。資本金8千万円で商業貿易部門の株式会社鈴木商店を設立し、持株会社鈴木合名会社を分離した。支店整理、経費節減など機構改革が行われ、関連会社のうち優良企業は鈴木の子の債務を負担、不良会社は整理の方針がとられた。

金子は関連会社の重役に就いていない。その点は確かに清廉・無欲だが、実際はすべての会社に君臨するということ。台銀から見れば、金子は「所有慾」がなくても「使用慾の徹底者」だった。26(大正15)年、高畑が帰国。高商派と金子(金子の出身地にちなみ土佐派)の対立で改革は進まない。〈工商立国を推進し、「煙突男」と言われるまでに各種近代工業の導入につとめた。(中略、大戦中に15億円の外貨を集め、船鉄交換で重工業の危機を救うなど)いわば国家事業を代行して、そのために傷ついた鈴木である。〉^{註1}

金子は、窮状は一時的でどの事業も前途有望という考えだが、台銀は金子退陣を迫った。

台銀も苦しい。27(昭和2)年1月26日、震災手形善後処理法案により金融不安が広がる。市民が銀行に押しかけ、取り付け騒ぎが起きる。昭和恐慌の始まりだ。震災被害者を助ける手形だが、不況による不良債権も含まれていた。台銀は鈴木の子の手形を大量に抱えていた。台銀は金融市場から短期資金を借りてやり繰りしていたが、三井銀行が資金を引き上げて万事休す。3月26日、台銀は鈴木に融資中止を発表。4月5日、鈴木商店破綻。

金子は家財一切を差し出した。高畑も高商派は子会社の商社日商(のちの日商岩井、双日)を引き継いだ。金子は鈴木の子の債務整理に奔走し、弁済後は鉱山開発など事業再開・主家再興を目指したが、44(昭和19)年2月27日死去。享年79。

1972(昭和47)年に鈴木OB会「辰巳会」が金子の文集を出版。高畑が題字と序文を執筆、「日本は工業化しなければ世界的に頭が上がらないという強い信念の下に一生を閉じた人」と綴る。高畑と行動を共にした永井幸太郎は、金子は成功か失敗かと言えば失敗だが、個人的考えでは成功と言う。恐慌を耐えたとしても太平洋戦争後に財閥解体されただろう。金子が広く資本を集めることや大銀行を嫌ったため、解体を余儀なくされたが、「ただそれだけの事」と述べる。^{註2}

金子の子の人となりを表わすエピソードがある。三井財閥のリーダー・池田成彬に融資の交渉をしたとき、池田が金子の子の事業拡大を批判した。金子は、世話になった税関長や裁判官が退職するので彼らに仕事を与えるため、と答えた。池田は、経営者として言語道断であると貸金を引き上げ、決裂宣言をした。^{註3}

米騒動や融資で、三井・三菱がその力を動員して新興の鈴木の子を蹴落としたという見方はないではない。証拠はない。財閥は経済のルール通りに行動しただけである。

城山三郎が描く金子の子の姿は、肩幅の広い身体、大きな耳、前頭の高いビリケン頭、鉄縁の眼鏡、乱視で近視で斜視、鼻が悪くコカインをふりかけている。いつも鼠黒の服で、結びがあり、ズボンに折り目はない。贅沢や女性に無縁、趣味は読書、狩猟、釣り。自宅で故郷土佐出身の若者たちの面倒を見た。

金子は妻の影響で俳句を嗜んだ。俳号は白鼠、忠実な番頭の意味がある。盟友・西川の死に際して、「梧桐の散り相もなき葉色かな」と詠んだ。西川家の庭は梧桐や竹など五月の緑でいっぱいだった。

註1 城山三郎『鼠 鈴木商店焼打ち事件』 文春文庫、1975年〈天下国家を望みながら、彼は本質に於ては、生涯、勤労者であった。鼠のように走り廻らねば生きて居られぬ人間であった。その勤勉さが鈴木商店を興し、そして、倒した――。〉

註2 柳田義一編輯『金子直吉遺芳集』 辰巳会、1972年

註3 赤松啓介『神戸財界開拓者伝』 太陽出版、1980年



出来事ファイル (No.18-10)

■徳山隆秀さん地域経済面に登場

元町1番街商店街で、徳山隆秀さんが事業部長に就任、その初イベントである水曜市が10年を超えていまだ健在だ。当初、商店街のイメージに反するとの声もあり、店の休みが多い水曜日に設定、反対意見が多数ならやめると決め、組合員に賛否をもとめると7割を超える賛成で今に至る。8月7日付神戸新聞は地域経済欄で取り上げ、農家とまちが手を組んだ経済活動として報道した。



■開港5都市景観まちづくり会議

9月1日(土)～3日(月)まで、函館で開港5都市景観まちづくり会議が開かれた。初日は14時30分～函館市公民館で全体会議を開催、歓迎会で横浜、長崎、新潟から参加の会員と交流。2日目は函館歴史紀行など4つの分科会にわかれて参加、3日目の全体会議で終了した。元町商店街から奈良山貴士・片山喜市郎、橋本友宏、松井隆昌の4氏が参加した。



□読者プレゼント

兵庫は日本一の酒どころ。伊丹や灘の酒は「下り酒」として大人気。江戸時代を中心に、その歴史と文化について紹介するとともに、絵画や文学資料などを通して、酒と人の関係を考える展覧会。

鑑賞ご希望の方は、住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。

期間:10月6日(土)～11月25日(日)
会場:兵庫県立歴史博物館
電話:0790-288-0911



大日本物産国会「摂津国伊丹酒造之図」
明治10年(1877) 兵庫県立歴史博物館蔵

■行き止まり標識設置

走水通を西に歩くと木下記念事業団神戸学生会館に突き当たり、道は右に折れて元町6丁目商店街に出る。しかし、車が走水通を西進してくると、車は右に折れ、やむなく車両通行止めの元町商店街を経てハーバーロードに抜ける。商店街へ出る車を防ぐため地元は標識の設置をお願いしていたが、このほど中部建設事務所により6丁目入口の走水通に、「この先150m、車両通行不可」の標識を設置した。



■おとな旅神戸はじまる

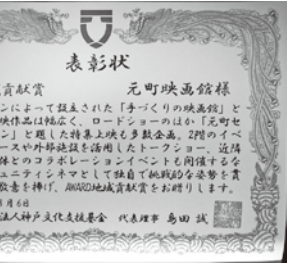
8月25日から「おとな旅神戸」がはじまった。店主の話を聞きながらの「元ぶら」を楽しむ既設の人気コースに加え、ユーハイム元町本店でバームクーヘンに浸る(試食・お土産付)、神戸元町生まれの革ブランド“kiichi”でのオリジナル革小物特別ワークショップ、神戸風月堂ではオリジナルゴルフ造りと季節の和菓子づくりの2コースも。電話:078-599-7110(平日9:30～18:00)



□元町ミュージックウィーク

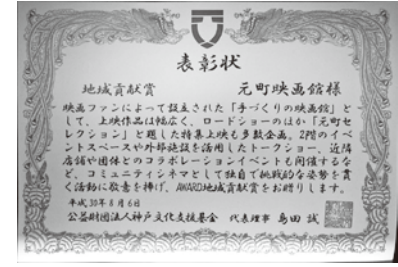
元町商店街は9月29日(土)～10月7日(日)第21回神戸元町ミュージックウィークを開催する。主催行事は9月29日(土)14時から兵庫県政150周年と南京町生誕150年を記念し、兵庫県公館で「ニーハオひょうご 中国音楽でひとときを」の公演を皮切りに、30日(日)は風月堂ホールで「ミュージカルの名曲を元町で」に多くのファンを招待。

元町商店街では1番街の呉服店丸太の2階ギャラリーが躍動、三木店主らに常連のメンバーが加わり9月29日(土)～10月7日(日)14時～16時まで、フルート愛奏曲、カルデットの楽しみ、イギリスの室内楽、Altoの響き、The Duoなど公演。ストリートコンサートは10月6日(土)と7日(日)に開催。6丁目西入り口、5丁目走水神社北側・学友書房前、4丁目まちづくり会館、3丁目風月堂ミュージアム前、1番街VEGA前、南京町広場の6カ所。出演はスーパーキッズオーケストラ有志(弦楽アンサンブル)をはじめ、兵庫高校弦楽部、元町スターズ、ポップス、フォークソングなど。その他、周辺のホールではパイオルガンをはじめ有料公演も数多く開催、多くの観客を楽しませる音楽祭。問合せは☎078-391-8448まで。



■元町映画館に地域貢献賞

開業して8年になる元町映画館は8月6日、手づくりの映画館として上映作品は幅広く、ロードショーのほか「元町セレクション」と題した特集上映も多数企画。トークショー、近隣店舗や団体とのコラボレーションイベント開催など挑戦的な姿勢を貫く活動に対し、島田誠さんが主宰する公益財団法人神戸文化支援基金からAWARD地域貢献賞を贈られた。



□読者プレゼント

明石藩の世界シリーズで、今回は「藩領を行き交う人々」と題し、西国街道の宿場町にまつわる古文書や工芸品、海のにぎわい、京・大阪との文化交流を育んだ文化人の足跡などをとおして発展した明石の海と街道のにぎわいをつたえる展覧会です。

鑑賞ご希望の方は、住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。

期間:9月15日(土)～10月21日(日)
会場:明石市立文化博物館
電話:078-918-5400



歌川国貞(三代豊国)《明石ノ浦景》(部分)